

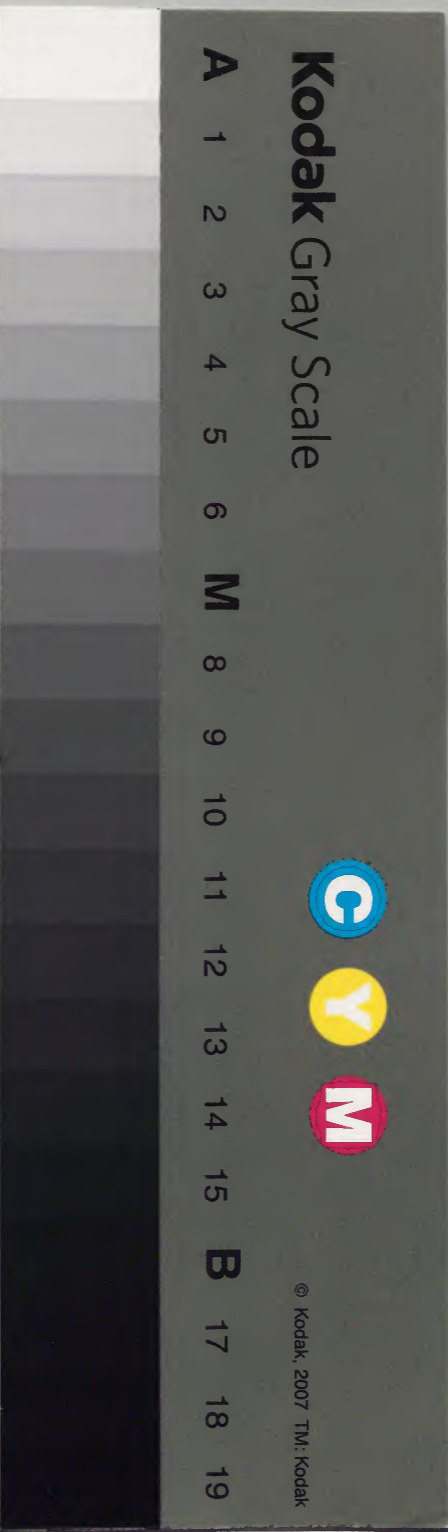
日本書紀傳

十九卷 十一止

和 一〇五二二號

五十九

内閣文庫	
番號	和 10522
冊數	156 (68)
函號	特 85 1



教
文庫
印

南
庫

南
庫

内一二六八三號

ふき無きが異しくして種オモヒシクの思惟しける上四百
 丁の委しく註せるが如く神樂の拍子の時小賢木を
 振て本方末方共小於々云事の有ハ全ク其を振る
 時小出す迄ある故小其手草の賢木をハ鉄鉄木云
 習へるうう木名也マ書れたるあめも飲飲木用
 ふる木マ云意ある可一又振木葉之調也マ之も其賢
 木を振る時小於於衣マ音を詠めて調小する事を云
 ふある可一小小竹葉を手草小採小就て佐阿佐阿と調
 へ云々同ト小る可小き小の小ころ小を小見小合小す小可小為小此古語拾
 遺ある直會の一件ハ昔より人の説難難ハ為為此古語拾
 事あるが故小其所の深く考へ註り註ききうう

○日本書紀傳十九

○五百四十七

然後諸神歸罪過於素戔嗚尊
サテノチニモロノカミタチヨビツミフスサノヲノミコトニ
 而科之以千座置戸遂促徵矣
テのオホセテチクラオキハラツヒニセメハタリヤ
 至使拔髮以贖其罪亦曰拔其
イタリシムルニヌカカミナテアコフツミラマタイハクヌキテソノ
 手足之爪贖之已而竟遂降焉
テアミノツメラモアガヒコレラノステニシラツヒニカムヤラクモヤラヒキ
此ハ素戔嗚尊の解除の一段にて天津宮事以て被の
 法の定ぬる始あるが傳十三丁の己の註るか如く穢

惡のハ此を身滌之云ハ罪過のハ此を解除と云て共
 の相離れざる事ハ有れども其本末有る事あり抑
 伊弉諾尊の御度ハ伊弉冉尊を黃泉國ハ追往させ御
 在し坐て其穢なき醜國ハ汚穢ハ觸させ御在し坐け
 るハ因て大御身滌為させ給ひけるハ其穢惡即罪過
 あるハ故ハ其二事を兼て四神出生章第六一書ハ被
 除焉之書されて美曾岐波羅比多麻布と訓ゆたり是
 身滌を本として解除をも為させ御在し坐けるあり
 其弟十一書ハ故欲濯除其穢惡乃云ニ故還向於橋之
 小門而拂濯也之有濯を須ニ具ニ訓むハ美曾具ハ
 曾具此ハ同ト古事記ハ故吾者為御身之禊而到坐
 笠紫日向之橋小門之阿波岐原而禊被也又見えたる

日本書紀傳十九
 〇五百四十八

是る備此の素戔鳴尊の御事ハ一も天照太神の御為
ハ御所行悪しく無道く御在り坐て謂ゆる天津罪を
犯させ御在り坐けるハ皇太神の見直し記直し給ひ
けれども猶其惡態不止て轉有しハ此を以て皇太
神の甚く御祭愠為させ御在り坐て天磐戸を閉させ
御在り坐けるハ天地の内ハ一も常夜往て世の
始れも後れも又マハ有あトウりける大禍事の極ニ
ありしハ素戔鳴尊ハ解除を負せ可き暇ある非
りけれハ諸神等の御心一ハ成て其御祈禱の御事ハ
仕奉りけれハ思兼神の思慮ハ違ハズ其驗有て遂

ハ石戸破る手力を以て招出奉りけれハ豫て儲置れ
たる新殿ハ遷座せ奉りて久方の天照國の日宮の大
御儀式の御事共此ハ至りて定め備ゆる事上件條ニ
ハ註し置るガ如し今如此く妖氣既ハ晴て復ハ塵無
く成ゆるハ就てハ素戔鳴尊の罪過を其ハ任ハ措く
可うさざる時の勢ハ成りけれハ此御政ハ及
ハりけるハ故此ハ罪過ありける故ハ解除あり
然れども下^{五百五}ハ引る万葉三^{四十}ハ天有左佐羅
能小野之七相管手取持而久堅乃天川原尔出立而潔
身而麻之乎有ハ此の古傳の正史ハ漏ゆる歌詞ハ

傳ハハハハ此を以て素戔嗚尊の御ハ解除を本
として身潔ハ其末ハ屬了者あるを知べき事あり
祝詞考ハ被マハ古事記ハ伊弉那岐命昔哀ハ到坐
て大御身ハ着坐る物を給ハむて筑紫の橘小ハ到坐
給ふ被逐ふ由あり次ハ海潮ハ浸りて大御身を滌
給ふ被逐ふ由あり次ハ海潮ハ浸りて大御身を滌
依て被逐ふ由あり次ハ海潮ハ浸りて大御身を滌
けり彼伊弉諾尊の御自捨給ハりて出させ奉りて逐
させしも事の意ハ法ハしく人代ハ至りても行ハる
を合せて被身滌の法ハしく人代ハ至りても行ハる
猶上件ハ云ハる如き意を未盡サレズ故其伊弉諾大神
の身滌ハ後戸神等ハ更アリ底 津次童命申津次
童命表津次童命底筒男命申筒男命表筒男命等の六

△珍御子等の御所
置共相定りて

神又大地海原の諸神等悉く成出させ御在し坐つ
此ハ於て上章ハ見えたるが如く是後伊弉諾尊
神功既畢靈運當遷是以構幽宮於淡路之洲寂然長隱
者矣亦曰伊弉諾尊功既至矣德亦大矣於是登天報命
仍留宅於日之次宮矣有る所ハ至らせ給へるハ
此ハ其驗有て大禍事毎平のより大吉事ハあり成此ハ
けるを此素戔嗚尊の御事ハ然り予ハ常ハ云ハる大被
詞ハ天津罪 止 畔放溝埋樋放頻蔭串刺生剥逆剥尿戸
許ニ太久乃罪乎 天津罪 止 法別気有るハ七ハ八條ハ
中ハ畔放溝埋樋放頻蔭串刺の五ハ御田を損傷

○日本書紀傳十九

○五百五十一

わて其罪食物の在り生剥逆剥ハ機殿を騷動シ給へ
るわて其罪衣服の在り屎戸ハ新宮を汚穢シ奉り
わて其罪住處の在り是日神の石窟の隠し給ふ起
り若て上百一より次ニ論め云るが如く此時の諸
神の祈禱ノミミツ給へる極意オシカ云ハ其天津罪犯の事ハ因
て損傷し給へる其食物衣服住處の事ハ至る迄中
休ヅめし止ぬるを猶能成シ整備へて皇太神の顯見
蒼生の為ハ幸給ハむ所思者大御意を取奉り
しハ終ハ其御怒の鮮サせ御在り坐すハ至り是
日神の啓戸を出させ御在り坐す所以あり然るハ此

素戔鳴尊の鮮除の功驗申すハ下章ハ遂に出雲之
清地焉乃言曰吾心清ニ之於其處建宮ヲ見え又出雲
風土記ハ意宇郡安耒御略中神須佐乃鳥命天壁立廻坐
之ハ時来坐此處而詔吾御心者安平成詔故云安耒
有ハ御心の清ニしく平穩ハ成らせさせ御在り坐す
事誰も知るか如しと雖も猶其ハてハ盡さいる者
あり此顯國ハ天降り御在り坐し著て後ハ諸御子神
等を生成し奉らせ給ひ先ハ天津罪ト犯し損破し
せ給ひける食物衣服住家の事共のミを一向ハカメ
整へさせ御在り坐て顯見蒼生の為ハ御恩頼を幸へ

させ御在り坐て又此類無き尊き高き大神と成りせ
給ひ天照太神ハ高天原より素戔嗚尊ハ日国より持
分て此國を相有たせ御在り坐て一ハ日神月神
と坐し一ハ共ハ天皇の大御祖神と御在り坐て無
究ハ国土萬物ハ御靈を合蒙め御在り坐す御事あり
此解除の功驗ハ依て御心の清ニ一々安く平くすハ
御在り坐す御為あり由己ハ上百十ハ委一ハ註一ハ徵
ハ明一ハの奉一ハ以て知一ハ辨一ハ不可一ハ者一ありける此ハ
云ハべき事ありざれば伊弉諾尊の身ハハ先ハハ大ハあり
功驗の迹著明きを素戔嗚尊の解除ハ先ハ大ハあり
給へるを後ハ益殖させ給ひけるハ其損益共ハ衣
食住り三の事ハて大ハ道の上ハ關係ハ事ありける

を人皆共ハ得曉り借此ハ然後諸神歸罪過於素戔嗚
尊而科之以千座置戸遂促徵矣至使拔髮以贖其罪亦
曰後其手足之凡贖之已而竟遂降焉有ハ其要領を
攀て子細ハあり事共ハ省ハたりて例の正書の体裁
あり舊事紀ハ正書一書を取合せて文を成せる物ハ
ラ猶不足ぬ所有ハ故文の次序を論め云ハ一右ハ諸
事有る古事記ハハ八百萬神共議マ有て神議の事見
えたりハ事の委ハき者あり歸罪過於素戔嗚尊ハ拾
遺ハ此ハ同ハ一第二一書ハハ科罪於素戔嗚尊マ有ハ
科之以千座置戸遂促徵矣ハ第三一書ハ即科素戔嗚

今下章第廿四ノ書
ハシテ其ノ意ヲ明カニ
無狀致諸神村以テ
座置戸而遂逐之
ト有リ

尊于座置戸之解除ヲ見え古事記ハ於速須佐之命
負于位置置戸ヲ有リ是あり借其于座置戸ヲ云ハ其被
具を置充ハキ座ありテ被具の事ハ次ハ在リ但其
の事を云テも唯ハ于座置戸ヲ云テ其物ノ名ヲ成
ル例ハ幣帛を美良具良々云ハ充座の義あり同
ありハ次ハ至使被髮以脱其罪亦曰被其于足之凡脱
脱之ヲ有ハ第ニ一書ハ科罪於素戔嗚尊而責其被
具ヲ見エテ是あり古事記ハ亦切鬚及于足凡令
被而之有リ拾遺ハも令被首髮及于足凡以脱之との
三有を此第三一書ハ以于凡為吉凡棄物以足凡為
凶凡棄物ヲ見エテ第ニ一書ハ殊ハ詳ハして

是以有于端吉棄物足端凶棄物亦以唾為白和幣以漬
為青和幣ヲ有る此傳を以て髮鬚ハ更あり于足の凡
をも被て脱ハし給へり一事の意隱る所無く亦
む有ける其ハ上百十ハ粗云るか如く右ハ以唾為白
和幣以漬為青和幣ト云る為字ハ變化ナリの化字の義ハ
て此物を變て彼物ハ化を云ふ此ハ於て實の白
和幣青和幣ハも成れるあり此を以て髮を被り影須
を切たるも下音第五一書ハ素戔嗚尊云乃被鬚散
之即成枚又被散胸毛是成櫓尻毛是成被眉毛是成據
禱樟ヲ有る其ハ御自然カ為させ給へるハ此ハ他神ハ

り然令為給へるありて別あるが如しと雖も其事の状
の相等しきと右ゆ云る白和幣香和幣の化出たるの
准ふる時ハ此ハ千^座置戸を造る可き料の材を賣り
りたりし趣知る事ハ已ハ傳十二百九^{天津金木}
の下ゆも云り備其^後手足之仇贖之と云ふ其仇ハ化れ
る物必有へうと云を傳無ハ知難きを右等ハ准
へて強て云むハ雄略天皇十三年御紀ハ苗田根命
罪有けハ收付於物部目大連而使責讓苗田根命以
馬八匹大刀八口^後除罪過と有て馬と大刀とを並奉
る此たるハ其歌ハ宇麻能即都擬播鳴思誓矩謀那斯

と有て馬の事を云ひ又大被詞ハ高天原ハ耳振立聞
物止馬牽立也と有るハ其物の起りる所以世ハ知
りざるハ手足の仇より馬の化出たりし事の有けむ
も知べうとす^{天武天皇五年御紀ハ四方為大解除用}
ニ^{物則}有る布ハ^{別国造輪被柱馬一匹布一帯云}
云るハ同トきを^{右の白和幣香和幣の美あり馬ハ此ハ}
考ふ可き所備又此ハ^{如此相並へて被柱と為る事正ハ}
み^{考ふ可き所備}て有る^{又此ハ}其罪又贖之と有ハ^{此ハ}賧物を出
して其罪を解除ハ事あり古語拾遺ハ此ハ大抵同ト
文体あるハ賧之仍解除其罪と有り此第ニ一書ハ以
嚙為白和幣以^後湊為香和幣用此解除と有ハ謂ゆる^後
程)を出して其罪を解除ハ所作を行ふ事あり若て第

公其大校詞
天津宮事以我大
中臣天津金木并
本打切米打斷也
千座四座座各置
足繼志天津管
津并李則斷未
其功以八針亦取
神自天津祝詞乃
本祝詞事年宣和
之看

三一書乃使天兒屋年掌其解除之大諄辭而宣之
有の又万葉十七五十一の奈加等美乃敷刀能里等其等
伊比波良悟安賀布伊能知毛多我多米尔奈礼之有亦
之の符合ひ又神樂酒殿歌の天原振放け見ぬハ八
重雲の雲の中處ナカトの中臣の天小菅を割被ひ祈りし事
ハ今日の日を為阿那許夜我が皇 神の神祖の共佐
古之有あど右めて素戔嗚尊の解除の較略ハ知るれ
たれ然るの其大神の此の身終為させ給へる事ハ上
五百四の云ふ如く其故事を取て詠め之聞えて
十九下の竹玉守無間貴無本綿乎次可比奈尔懸
万葉三四十一の竹玉守無間貴無本綿乎次可比奈尔懸

公其大校詞
天津宮事以我大
中臣天津金木并
本打切米打斷也
千座四座座各置
足繼志天津管
津并李則斷未
其功以八針亦取
神自天津祝詞乃
本祝詞事年宣和
之看

而天有佐羅能小野之七相菅手取持而久堅乃天川原
尔出立而潔身而麻之字有是あり傳八九十一十三
一十下註了素戔嗚尊の和魂速佐須良比咩神カキナヒ申す
小就て考るの右の左佐羅能小野之云ハ其割被の天
小菅を採ぬ地名ついで然りの天工の遺ぬるあり可ハ且天川
原ハ謂ゆる天安河のて此時の被處ありけむ事申
すも更ある御事あり有ける 其十六卷三十一下ハ
野尔茅草茹 有ハ水潔の事ありさねとも正し
く天上ハ然る地名の有ガ為あり事云と更あり七卷
二十七下ハ天在日賣菅原草莫茹嫌有を冠辯考ふ
此ハ天有る日續けて日賣菅原ハ此ハ在る地名あり
る可ハ云ぬつぬ右の例を思ふハ此ハ在る地名あり
の佐須良比咩神の御名あり依ぬる可ハ此ハ在る地名あり

○日本書紀傳十九

○五百五十五

てハ非可一又六卷十九丁ハ千鳥鳴其佐保川丹
石ニ生菅根取而之努布草解除而益字往水丹潔而
益字ニ有_レ此ハ別ノ事アリトモ管を取テ解除ハ水
を浴_テ身滌_スル_ル状を云_フル_ルテ解除_ハ身滌_ルノ事_ヲ
能_ク分_チ云_フ己_ニ而_テ竟_ニ遂_ニ降_ル焉_ハ第二_ノ書_ハ用_テ此_ノ解除_ノ竟_ニ遂_ニ
以_テ神_ヲ逐_ル之_ル有_ル如_ク禊_ノ祓_ノ事_ノ竟_テ後_ノ事_ハ
リ_ハ此_ハ第三_ノ書_ハ既_ニ而_テ諸_ノ神_ヲ噴_ク素_ヲ鳴_ク尊_曰汝_所行_甚
無_頼故_不可_住於_天上_亦不_可居_於葦_原中_國宜_急適_於
底_根之_固乃_共逐_降去_于時_霖也_素鳴_尊結_束青_草以_爲
爲_笠蓑_而乞_宿於_衆神_衆神_曰汝_是躬_行濁_惡而_見逐_謫
者_如何_乞宿_於我_同距_之是_以凡_雨虽_甚不_得留_休而_辛
苦_降兵_自尔_以来_世諱_著笠_蓑以_入他_人屋_内又_諱負_束

草_從人家_内有_犯此_者必_債解除_此太古_之遺_法也_見
元_た是_其傳_ノ詳_リ有_ル者_有リ_古語_拾遺_ハ仍_解
有_ル略_{あり}古_事記_ハ其_詳除_ノ事_ハ何_も無_くし_て
唯_ハ負_子位_置戸_亦切_鬚及_子定_化令_枝而_神夜_良比_夜
良_比岐_ニ有_ル珠_ハ○_罪過_ハ雄_略天_皇十_三年_御紀_ハ
事_者ハ_此有_ル○_罪過_ハ雄_略天_皇十_三年_御紀_ハ
被_除罪_過之_有を_共都_美之_訓来_ル第_二一_書ハ
糾_罪於_素鳴_尊有_ル同_一け_レハ_必然_ル可_レ此_罪
過_ハ之_ハ古_事記_ノ上_ハ猶_其惡_態不_止而_轉見_元第_三
一_書ハ_凡此_惡事_曾無_息時_有之_其下_ハ汝_所行_甚
甚_無頼_也汝_是躬_行濁_惡而_見逐_謫者_有如_ク惡_行
行_を濁_惡を_押並_レ云_フ稱_有ル_ル崇_神天_皇六

年御紀の晨興夕惕諸罪神祇同十二年の今鮮罪改過
 敦礼神祇神功皇后御紀の也是以命群臣及百寮以鮮
 罪改過と有る其事を古事記の八更取国之大奴佐而
 種_ニ求生剥逆剥阿離溝埋屎戸上通下通婚馬婚牛婚
 鶏婚大婚之罪類为国之大被而_レ有_レ又曰御紀の小
 竹祝_ニ天野祝_ヲを合葬_ルた_ル事_ハ依_テ適_ニ是_レ時_也書_畫
 暗如夜已經多日略_中時有一老夫曰傳聞如此依謂阿豆
 那比之罪也略_下之有_リ又履仲天皇五年御紀の或者曰
 車持君行筑紫国而悉投車持部兼取_テ禿_テ神者必是罪矣
 略_中目以数之日尔虽車持君縱檢_テ天子之百姓罪一也

既分寄于神祇車持部兼奪取之罪二也則負惡解除善
 解除而出於長渚崎令被潔_ニ見_テ元雄略天皇九年御紀
以王即小薄伐天討_ヲ行_フ云語も有_ルあり
法曹至要抄罪科條
八虐事一曰謀反
二曰謀大逆三曰謀叛四曰惡逆五曰不道六曰大不敬
七曰不孝八曰不義有_テ其_レ余_ハも多_クの罪條を
載_ルた_ル也然_ルる惡事の_レを指_テ罪_ト云_ハ先_ニ大_ニ被_テ詞
上古の意_ハ非_ズる事_ハ次_ニ云_ハを_レ見_テ辨_ス可_シ先_ニ大_ニ被_テ詞
 小過犯_ル家種_ニ罪事_也天津罪_止畔放溝埋掘放_テ類_テ蔣_串
 刺生剥逆剥屎戸許_ニ太_久罪_字天津罪_止法_別元_因
 津罪_止生層断死層断白人胡久美己母犯罪己子犯罪
 母與子犯罪子與母犯罪畜犯罪昆虫_昆乃災高津神_乃災
 高津鳥_乃災畜_ハ志_盡物_ヲ為_テ罪_許ニ太_久乃罪出_武之有

天津罪ハ此ハ謂ゆる素戔鳴尊の犯給へる罪過ハ
 して衣食住の三物を損傷り給へりハ罪是あり鈴屋
 翁の後叙ハ此国津罪の條ニ生膚断あり 胡久美子
 七四條織を以罪と為るあり已母犯より五條ハ許あり
 昆虫乃災より三條ハ災ハ過ハを以て罪と為るあり
 未二條ハ惡行あり如此く類を分て次第ハ拳たり備
 如此四種有る中ハ殺の要ハ惡行をハ主と為す織を
 以て第一の罪とす神祇令義解ハ凡散衛之内云不得吊喪
 問病謂有重親喪病者食實亦不判刑殺不決罰罪人不
 祚音樂謂不在預祭之類也不預織惡之事謂織惡不淨之云
歌儻之類也

又貞觀儀式大嘗卷中も可忌事六條予喪問疾判刑殺
 決罰罪人作音樂事謂習供神之言語事死稱祭保留病
血赤汗預喪產并觸雜畜死產事喪忌世日食實
宗人姓稱苗人預織惡事被詞所云天罪国罪
七日產三日尚限而預織惡事之類皆神之所織所
清乃參但不得預祭事
 也行佛法事奉哀并改葬事と有を以て思ふ可し此内
 多くハ織カて惡行ハ一も無し又右の預織惡事の本
 注よて織の罪を主と為る事を思定めし曉る可し
 云ねき右の如く解除ハ織惡を以て罪と為る事ハ
 ハ違ハ非トと虽も上五百四ハも云るか織惡と罪過
 の差有り解除ハ身條の別共有る事ハ一概ハ云

へうさるか中々神事ハ穢惡を先ハ惡行を次ハ
爲了事ハ諸の惡行ハ更あり世の禍事ハ何も穢
惡あり成以て出來る事あるか故ハ神事ハ其本ハ
就て穢惡の罪を主ト蒙る事あるあり然るハ惡事の
刑ハ處く事も有レ七七の解解例ハ罪を穢惡
の刑ハ處く事ハ解除ハ方ハ一向ハ就たる者ハ
ふ可レ思ハ又後叙ハ云く先都美ハ云ハ都ハ美ハの約ハ
たる言ハて本都二年ハ云ハ不用言あり都二年ハ何
事ハも有レ惡ハ事ハの有ハ云ハを體言ハ成レて都二年
とも都美ハとも云あり然レ罪ハ云ハ元末入ハの惡行
の云ハ限レず病諸の災又穢ハ事醜ハ事ハ外

も九九て世ハ人の惡ハ嫌ハ事ハ皆都美ハ
り万葉の歌ハ人の身ハ上ハ諸の惡ハ事ハの無ハさを都
美那久ハとも都二年事無久ハとも都二年波受ハとも云
るハ今世の俗言ハ無事ハて無難ハてハ云ハ意ハて即
都美無久ハ云事あり中昔の物語書ハ人の容儀カクテ
又志マシ標バあハの惡ハ所無ハさを罪無ハ云ハひ又萬事ハの
惡ハあハ然ハて許ハさるハを罪免ハさるハ云ハるハあ
とも惡行ハ有レぬ事ハを都美ハ云ハるハ古言の遺ハ水ハ
あり又為レ欲ハ云ハ欲ハ事ハを憚りて得為レ得ハ云
ぬを都二年ハとも都二年ハ志ハ年ハとも云ハ是も然為レ惡

傳四二二三十一注
る如く續紀
卷五十八詔小
幸久都幸事
無久

四十九四都追
年許多奈久
波也可故里麻
勢

く云へば悪き事として包三憚るるあり本同意あり
但此ハ轉りたる末の意ありて本ハ悪き事の有を云
すり出たり包三憚るを本の意として包三憚る事あり
故ハ悪き事をも都ニ美々云々心得玉ハ本末違ふ
可し諸右の如くありて都美々云ハ悪行のこみ限る
ざるを罪字ハ悪行一ハ就て當たる字あり都美て
ふ言の想てあり當るざるあり略て云わたり其都ニ
美々云例ハ万葉五三十一都ニ美無久佐佐久伊麻志
終速歸坐勢十三六三行ハ莫管見身疾不有十ハ言幸眞福座跡急無福座者二十
十九ハ安里米具里夏之字波良波都ニ麻波受可弊理

伎麻勢登又八十多比良氣久於夜波伊麻佐祢都ニ美
奈久都麻波麻多世等又六十由久左久佐都ニ年許等
奈久布祢波ニ夜家無あり有七ハ幸くハ對へハ
平けくハ對へたり又十八三十一ハ波流佐米尔許母理
都追年等伊世母尔都宜都夜々有も亦同ト例ある可し
九て都ニ年ハ物の泥ニ滯りて行難む意の言々聞ゆ
ゆハ此之切て都美々云も然りて人々為る業を妨け
滯るす義ありあり又獄令ハ坐字を都美須了訓ニ
有も罪為又罪並の義ありて罪の言々本々出末
れり語あり又源氏松風卷ハ罪無き狀あり思捨難
うとる有ハ小児の愛あり悪け無きを云ハ又常
變卷ハ罪輕げあり有ハ物の難僻ハ無く目易きを

○日本書紀傳十九

○五百六十

云あり又白宮卷小事の觸て我身の都二賀有る心ち
す^と有る都二賀、病有るを云ひ名義抄の恙を都二賀
又宇礼布^と○歸、拾遺にも有る共の與世色^と訓り
有る是あり○歸、拾遺にも有る共の與世色^と訓り
與須、物を寄せ聚むる義あるが此言の就て考る
上^{百三十}ハ下^ハ引る古事記の於是萬神之聲者狹魂那須
皆滿萬妖悉祭^と有る萬神之云、此磐戸隱の御事
の依て諸神の愁迷の收たるあれが別わして次ある
萬妖悉祭、其あり以前の萬物之妖悉祭^と有る相照
して考るの萬物之妖と、諸の鬼魅の恠異^とき事を
成すを云ふあるが其も其本を正し云以て行く時ハ
素戔嗚尊の御荒びの依て日神の隱坐し日神の隱坐

の就て然る妖鬼の所を得て難おせしあるは其祭端
の罪過素戔嗚尊の在り故日神の出させ御在し坐す
の就てハ妖氣亦^自然の^止ぬ可き事ありけりハ
罪過の約り歸^ハわく所獨素戔嗚尊の御在し坐か故ハ
歸字を書き世^ハ代^ハ々^ハ云あり^又妖鬼^{あり}ぬ^も其^神
ハ^共の^荒び^{たり}も^有る^也を^其も^其神^の御^命を^受
て^物為^{たり}可^けり^ハ其^枝神^{あり}て^ハ罪^科を^及ぶ^給
政^みたり[○]科^之以^ハ
漢籍訓^ハめて古の訓ハ非ず第三一書ハ科素戔嗚尊
千座^置解除^下章第四一書ハ故諸神科以千座置戸あり
見え古事記のも負千位置置戸^ハ有る依て科之^以の三

千座置戸と有る
古三字と別て本
任下

山猶次ある促徴の
下あり

字も引合ひて意富世氏と訓べきあり即被具を課す
る事あり第一一書ハ科罪於素多鳴尊而責其被具第
三、一書ハ有犯此者必債解除有あども物を出さし
むる事を云あり履仲天皇五年御紀ハ負惡解除善解
除の負も此ハ同ト又延暦廿年五月の大政官符ハ定
准犯科被例事云ニ有ハも科字を用ひしれたり大
凡科と課ハ同義の言ある事崇神天皇十二年御紀
ハ宜當此時更校人民合知長幼之次第及課役之先後
略始校人民更科調役略之有る此ハ知ハ但親名
也課其不知法者罪責之也有る舊唐書ハ凡賦課
制有ハ一日租二日調三日役四日課有ハ此ハ常

式の事ハて課へるハ似たり○千座置戸古事記ハ千
位置戸と作り記傳九丁ハ千座ハ私記ハ座者是置物
之名也と見えて案ハて何ハても其被物を居置く
物を云ふ人の座處を久良草と云も同意あり故此記
ハハ位字を書り千ハ其数あり犯の重さ輕さの任ハ
被も重さ輕さ有て被物も多き少き品有を此ハ極メ
て重けハ極めて多きを千ハ云あり後世ハ四座
置ハ座置あど云ふ名目の遺れるを以見ハ幾位
云て被の品を定めしありと云ハ信ハ然事
あり大被詞ハ千座置座ハ置足

○日本書紀傳十九

○五百六十二

叙ふ人この出たる被物を取集めて居置る臺方
 りて云れ又幣帛を美氏具良と云も何の在り神の奉る物を臺
 の載る由めて充座の義ある事傳二十一七十云る
 を以て知べく且天長十年御紀 出雲国造奏神壽の
 献物の倉代物五十荷と見え大嘗祭儀行立次第の次
 倉代十輿作里木四角屋形葺葉其裡張布塗以白土
厨子形一其屋形以白細布鴛鴦障子立于四面輿別居
基云二と有る此等其献物を御前臺に載す可き物あり昇
 て持参行くに就て倉代と云るに其座座實の
 義あるあやを合せて此千座の座を思ふ可し傳主備延
 曆廿年五月の太政官符の定准犯科被事一大被料物

廿八種云二一上被料物廿六種云二一中被料物廿二
 種云二一下被料物廿二種云二二見え是は中項
 の御定ありども上世より何座と云りて罪犯の輕重の依て被柱の
 多少有つらむら此の千座と云は此の素戔鳴尊
 の罪犯のしも天地の初判りてより以降世の例無き
 大禍事と成けるら有ゆる物の限りを輸さし奉
 りるありけり六月十二月の大被ハ上ハ朝廷百官より始
 奉りて下ハ天下萬民の鮮除ある故に諸国の令せて
 被柱を令出する事あるに天下を合せて其大ある事を云むと
 て千座置座波志置足氏と云る是を以て其義を思合

△春日祭詞小頁
流
神宝者略如横山積
置氏

世曉了可き者あり
然るを私記の言置積被物者
罪人出其物積置千處而曉罪故曰千座置戸之宣ハ
り新祭詞初穂字波千類八奉置氏大忌祭
詞の千稲八千稲引居氏風神祭詞の千稲懸
引居置氏大嘗祭詞の千秋五百秋神嘗祭詞の千稲
千税余五百税字あどハ更あり向風土記の千穂
又歌詞の千町田又千束の文又蝦夷の千島あど
も一十百千方之限れる数の千を云の非ず唯物の
甚多き事を千某置戸の置ハ其座の上小物を載せて
神の奠るを云ふ新年祭詞の千類八百類奉置氏又
荷前者皇太御神能大前ル如横山打積置氏大忌祭詞
の初穂者略如横山打積置氏風神祭詞の奉字豆乃幣
帛者略如横山打積置氏平野祭又久度古開祭詞の雜物

△五丁布施於香
三吾没許地能年

乎如横山置高成氏道饗祭詞の横山之如久置所足氏
太神宮月次祭神嘗祭等詞の如横山置足成氏遷却崇
神詞の几物ル置所足氏有を又大忌祭詞の初穂者
略千稲八千稲引居氏風神祭詞の初穂者略八百稲
千稲引居置氏あとも云て置を居とも居置とも云
て同卜事あり^{後叙ハ}万葉三四丁の寧葉乃午祭ル置幣者千
一五丁の不相尔夕卜字向常幣ル置ルあどを引置ハ
神の幣の奉る事を置とハ云りや聞えたりハ置座の
置も物を被物ル出すを置とハ云ある可しと云れ又
記傳の置ハ其物を持出て被為る處ル置ル意より云

○日本書紀傳十九
○五百六十四

るあり大祓詞の大中臣天津金木并本打切末打断氏
千置座座置足波志との有の師説の金木并書るハ借字
ハて是ハ被物を置べき置座ハ作る料の拵ミモトを云あり
此金木を置座ハ置く如聞ゆれども然ハ非ず文意
ハ金木を本末打切て千座置座ハ造て置足ハ一と云
ありと見ゆ今思ふハ此説信ハ宜し置べき種ニ物を
ハ略きて云ず其置座をのミ云事此と同一説ハ
金木を刑具と為るハ甚誤あり臨時祭式ハ 九祈
年月次神今食新嘗等祭料置座木并有ハ置座ハ造る
料の木を云ふ此ハ神ハ供奉するハ料あり儲其置座

ハ四座置八座置と云品有り木工寮式ハ四座置八座
置以末為之長者二尺四寸短者一尺二寸各以八枝為
東名称ハ座置長短各以四枝為東名称ハ四座置と見ゆ
四時祭式有宮式大嘗祭式ありハ祭料物ハ中ハ此
名見ゆ今考るハ置座ハ被物を居置く座ある故ハ
名ハて四座置八座置も本ハ四座の置物ハ座の置物
と云事ハて其置座の教以て云たるありハ一種の物
の名ハ非ず然ハ稍後ハ成てハ其名のミ古ハて物
の狀ハ異れりハ見ゆ其故ハ式ハ諸祭の料物の中ハ
載るを見りハ他の雜ニの物を居置べき料と見ゆ

ず唯別の一種の物と見え又右に引る木工寮式の中
るも物を居置べき物の状に非ず然るに延喜の頃の
ハ唯象許りのありけり但右に引る大被詞の天津金木
字云こも有るハ上代の置座も木工寮式の中云々如
くある小木を連ねて結造れる物ある可し今世のもの
有る抑筥の状にても推度する然るに後世のものも彼置
座に造る可き木を束ねて即其を置座と称し其木の
数を以て彼座の易て四座置八座置てハ云ありけり
略々有るを以て其事の状知る者傳十二百九に註る
ハ如く伊弉諾尊の大御身祿の橘之檉原の御在坐

一時の被物を其檉ハ懸させ給へるの起るが其
檉即檉にて謂ゆる金木あるを天上のて此千座
置座ハ其木を用ひさせ給へるか故に大被詞ハ右
に引る如く有て後世其例を傳る者ハあむ有け
る臨時祭式ハ楯板置座木等之類ハ五畿内諸国神戶
百姓令檉進之と有て下ハ山城國楯板二百枚大和
國楯板置座木一万二千隻又河内國楯板二百枚
十枚置座木一万二千隻又靱編戸百姓等置座木一千
枚置座木一千二百隻和泉國楯板百一十枚之有て此ハ何木
を用ふとも知る詞ハ天津金木を云々ハ檉木の被
る者置座の戸ハ記傳ハ處の意うと誰も心得ぬ
然るハ負々云む事叶はず此ハ中卷末伊豆志表登賣

神を兄弟の男の婚ひける事を云ふ故に令詛言云二
 如此令詛置於烟上云二即令返其詛戸マ有も其詛事
 の用ひたる種ニ物を指て詛戸マ云此ハ此も置座ハ
 置く被 具を指て戸マハ云あり然ハ千位の置物
 マ云むッ如シマ云此なる信ハ然る言あるハ就て考
 るハ戸ハ足の約ゆるめて右ハ引る大被詞ハ千座置
 座ハ置足^{波志}マ有る是あり然ハ置戸ハ置足ハて
 其座の上ハ置充るを云ハ備足^{ナリ}の言の戸マ約ある例
 ハ数量の十を鎮魂歌ハ多理マ云るを日文ハ登マ
 云ハ人ハ靈足^{ヒタリ}の義あるを約めて此登マ云称マ成れ

△海宮遊行草ハ
 益復急敷又兼六
 二書ト多責致鈎
 の急更此ハ固一

る多^{ナリ}多理を切て登マ云例あり此を以て詛戸ハ詛
 足置戸ハ置足^{ナリ}ハて其足ハ物を指一云称あるを知べ
 一私記ハ置戸者^{ナリ}是種置此千處之物便為其戸令罪人
 出其中矣故云置戸也マ有ハ如何ハ説あり罪人
 其千座の置物の中あり出ハ遣ハ依て置戸マ云
 満^{ナリ}ハ甚心得ぬ事あり又後叙ハ置足波志ハ置
 元難^{ナリ}ハ思ハ人^{ナリ}有ハけハ上ハ許ハ大久乃罪出武
 マ有ハて各其被物を出す事ハ云ハても聞えハハ
 此も自然其被物を置く事マ聞ゆるハ古文ありマ云
 應心得置マ一〇遂促徴笑ハ遂ハ勢米波多理伎マ訓
 べ一△此促徴ハ次ハ使被髮又被其手足之凡マ有る足
 於て在置戸の物を云

あり第二一書ハ責其被具マ見内彼伊時諾尊のハ
 其泉下の穢ハ觸させ御在ハ坐ハ事を後ハ悔さ

今洲の方言ハ勢
賀年々云々是ハ
也

世給ひて其御身の着させ給へる物を御自出させ給
へるある此ハ素多鳴尊ハ罪過有る事を傍より責
て出させ奉る所ある故ハ促徴マハ云り雄略天皇十
三年御紀ハ齒田根命竊ハ米女山邊ハ島子を犯せる
を天皇聞以齒田根命收付於物部日大連而使責讓齒
田根命以馬八匹大刀八口被除罪過マ有るを思合せて
曉マ可き者ありクハ勢牟公謂ゆる逼迫マ有る云あり
海宮遊行章ハ以此波瀾汝兄若兄悔而祈者云ハ如此
逼惱則汝兄自伏其第四一書ハ如此逼惱自當臣伏
云ニ兄既窮途無所逃去古事記ハ其段ハ更起荒心迫

来將攻之時云ニ又神武天皇御紀ハ乃引軍還虜亦不
敢逼其古事記ハ將為待攻而聚軍云ニ牙由氣矢刺而
追入又其水垣宮段ハ尔追迫其逃軍到久須波之度時
皆被追窘マ有る當りて御紀ハ不得免マ云語有る此
等ハ軍事ハ係りたるを猶雄略天皇十三年御紀ハ天
皇因噴讓曰何處奴不畏朕顯宗天皇御紀ハ小楯噴之
曰何為大澤マ有るハ物を呵り噴るあり万葉五十九
ハ等利都ニ伎意比久苗母能波毛ニ久佐尔勢米余利
伎多流云々有る皆同ハ義の言あるを其用以所の異
あるの云あり

古今集ハハ云ニ老ぬて何とて我身を脱さけ

五百二十八

△又甚切て意ま
時ハ云

△書ハ世人不情
針此其縁也見
元又

云云云云常ハ多ク云語あり名義抄ハ促字を母典
保領又宇那賀須又知加豆久又須美夜加那理又知加
志又都豆麻流又美士加志又世年流又世麻流又世米
登流ある訓ハ字鏡集ハ此字世麻流又世米登流
有徴を波多流マ云ハ物を白ありて碎クを波多人
マ云ハ物を遣ハ亡スるをも波多須又ハ波多久マ云
あハ同語ハ一て竟有の義あり此第一一書ハ責字を
訓ク第三一書ハ債其解除マ有ハ意冒須ありハ名
義抄ハ波多流マ云訓ト見え今義解ハ謂徴財也マ註
サマ此を以て右の斜ハ同義あるをも思ふ可ハ海
宮遊行章ハ故別作新鈎典ハ不肯受而責其故鈎マ
見え古事記ハ其兄強乞徴云ハ備如其兄罰失鈎之

狀ト見え職員令刑部省職掌ハ債負マ有ハ負せたる
を責むを云あり考課令ハ徴賧ト見え又令ハ律ハ
も多ク徴を波多流マ訓マ共ハ同ト此ハ罪人ハ物を
賧ハ一ハて其ハて竟マ成マ義の言マ聞内名義抄ハ
苗志又志苗須又夜年又波多流又阿良波須又米須
又母登年又那流又那須又多陀須又登抄年又母典保
須又志米須又世武又伊麻志年又多布登志又登賀又
多陀須マ訓マ又徴逐を波梁米意母布ト有リ通證ハ
左氏傳ハ貢包茅不入王祭不共無以縮酒寡人是徴舊
唐書憲宗紀徴斜祭歛ト有リ備此促徴ハ責懲トモ讒
責トモ促懲トモ急責トモ○至使按髪ノ至ハ小ハ
有を常ハ同ハ訓マあり
大ハ及ハる謂あり然ハ古事記ハ亦切髪マ有
て髪ノ事無ク此ハ髪ノ之有テ鬚ノ事無キハ互ハ

○日本書紀傳十九

○五百六十九

高天原美事
鳴尊の御国非
りけし其神の御
こゝ御在り坐さ
るが故に然し

傳漏せりて此ハ必髮鬚共ハありてハ至便の事の
落著さるを思ふ可し古史ハ合按髮須及手足之凡々
書きたるハ紀記を合せて文を成されたりける者亦
るか必然無くてハ相叶ふ所トキ所ハあるむ有ける然
れども古来此註ハ限りて允當なる説無し此ハ上五
五下ハ註るが如く此ハ髮鬚を合按らる事ハ右ハ
謂ゆる千座置戸の置座を造る木を成さるれしめて
其毛髮此ハ於て始て木ニ化て生出りしありけり芽
二一書ハ成唾為白知幣以漬為青知幣トモ有て唾漬
より知幣の化生たるハ思ひ比しふるハ此より後ハ

事あるが下章第五一書ハ素戔嗚尊韓御之鳥是有金
銀若使吾兒所御之國不有淳室者未是佳也乃按髮鬚
散之即成秋又按散胸毛是成檜尻毛是成椀眉毛是
成椀障_略下有此ハの解除ハ然る駿の御在り坐け
るハ就ての御事と聞ゆれば此時ハ成出けむハ彼天
津金木ある可き事大祓の法ハハも謂ゆる天津宮事
ハハして天上の儀式あるを思ひ自然ハ著明りの亦
玉者りるハ猶第一一書の傳ハ云事の有むを考合す
既多故其盜身之物悉皆出畢無物之可取故或按髮或
按礼今科上中下被令其罪人出被物者儼此耳と見え
記傳ハハハ二義を以て説れたる中ハ一ハ此被極
めて重き被ある故ハ被物も決めて多く千位を徴する

合傳二十三(下)のり多
 米氏系圖の志賀
 高元太宮御宇云
 二小時天皇御命
 賤乃人字四方国造
 献支之有ハハを
 以て賤之事有
 けりあり

あるが須佐之男命の所有する物の限を取ても猶足ぶ
 る故に其御身の生たる髪鬚ハ少くも毛髪ハの類を出
 り用ふるあり云々云々然る味気無き事を為る
 せりさて何の賤ゆり成む然る味気無き事を為る
 ハ別みこ有けぬ被るハ似てしも着ざる事あるを
 や此ハ素戔鳴尊の御身の物より被具を化し出させ
 奉りし事ハ心着ぬはる誤ありけり又纂疏ハ其物已
 盡而不足則被髮被甲以禱之蓋因刑之始也と有るが
 僻事ハ甚トキ ○賤其罪ハ口訣ハ賤代罪也と有るが如
 く物を出て 其罪ハ易き義ありハ万葉十七 一十造酒
 歌ハ奈加等美乃敷刀能里等其等伊比波良倍安賀布
 伊能知毛多我多米尔奈礼と有る安賀布ハ全く解除
 申就て云るあり但此ハ我命を以て賤あるあり
 其十二 三十九 十小時風吹飯乃瀆尔出

居乍賤命者妹之為社と有る身潔とハ云はれども十
 一 六ハ玉久世清河原身被為命妹為と有る依て知
 けり 儲右ハ賤命と有る此ハ命と云るハ右ハ云
 る如く賤とハ物を出して其罪ハ代る事にし有けれ
 ば然して壽命を延ぶ由めて其賤物ハ身の罪を負せ
 代へせたるを以あり 神樂酒殿歌ハ天原振放見ハバ
 ハ重雲の雲の中處の中臣の天小菅を割被し祈りし
 事ハ今日の日の為云々有る罪を賤ひて壽命の延
 びたる由ある事今日の日の為と有る知へし古
 今六帖ハ六月の名越被為る人ハ十年の壽命延ぶと

△右の購物同業
 △説文に以取有
 所求也云云又
 △阿賀布に訓
 云云の説文に
 罪以取賤也云有

云ありと有あどの罪を贖へるか故あり然れは阿賀
 布ハ吾代アガフある可く後ハ阿賀那布と云るハ吾並アガフゆて
 其も吾ゆ代る謂ありけり各義取ハ賤字阿賀布又加
 陀流又阿布又都久又都具能布又都能流又見元又賀
 也ハ購也ハ阿賀布云訓有あり新撰字鏡ハ
 然訓ハ備此ハ素戔嗚尊ハ被具を徴りて罪を令贖給
 へる御政あるが後ハ二季の大被と共ハ御賤ハ御事
 御在ハ坐ハ又毎月晦日ハ神祇官獻御賤物之云事
 の御在ハ坐を公事根源ハ賤物ハ身の災異を賤ハ物
 と云意あり人形を作りて身の代と為る事同ト心友
 るゆ也と記させ給へるが如ク其委ハ事ハ別ハ大

被詞講義儀式以下の諸書ハ徴して詳記せる事ハ
 ハ有れども今ハ云てむハ四時祭 御賤式ハ上
 略右晦日ト部各著明衣其一人執御麻二人執荒世和
 世二人取壺宮主史生神部等左右分頭前驅次中臣官
 人次御麻次東西文部各執
 横刀次荒世次和世並著木
 綿鬘云ニ
 次中臣捧御麻進就版位勅曰參末即称唯進就階下中
 臣女簡中臣氏女
 堪事者奏定於殿上轉取供奉畢授中臣即執授ト
 部一人令向被所云ニ宮主披荒世授中臣中臣取授中
 臣女即執量御體惣五度訖次宮主捧土器中入ハ
 石等如鈴中
 臣轉取授中臣女執奉御訖退授中臣轉授宮主宮主執

其料物の中鐵
人像二枚と有る其
小属者あり可
其六月晦日大被
除上各金幣横
言金銀塗金像各
二枚と有る下以上
東西文部所預
有て其元文六捧
以銀人請除福英
捧以金刀請延帝
新有以節折
以下の事と別
り

授後取下部荒世事訖退出亦中臣引和世進退如荒世
儀其荒服者賜下部和服者賜宮主訖皆退出臨河解除
而去と有るハ一ハ御麻此ハ大被詞不謂ゆる天津菅曾
あり二ハ東西文部被刀を奉る事有る其ハ元忌部の
職掌の彼ハ移り申上二百三
十丁 小己ハ云り此ハ素戔
鳴尊の御大刀を以て令跪奉れりけ玉事之所思ゆ三
ハ荒世和世の事あるハ下ハ荒服和服と見えたるハ
決く第一二書ハ以嚙為白和幣以淺為青和幣之云事
の遺制あり次ハ執量御體惣五度と有るハ竹の筵を折
て御體を量奉り事あるハ故ハ此を節折と云る

△臨時祭式ハ凡
六月十二日晦日御
贖料ハ若月
九日以前申辨官
令山城國採進之
と見えたり

り荒世和世の世即是あり江次第ハ天皇起給與女量
御體五度先量身長次量自兩肩至御足次左右手自胸
中至指末次量左右腰至御足次至左右膝至足九
枝 中臣女毎度兼取示神祇官と見えたる此竹を宮
主秘事口傳抄ハ此篠ハ山城國六人部と採進しと有
る六人部ハ身取部ハ其節折ハ篠を貢る代りて其
篠ハ上三百七ハ引る神樂篠歌ハ止祢利良加古之仁左可禮
留止毛子加乃佐ニ有る是あり可上若て儀式ハ宮
主取祝訖授後取下部マ有るハ此ハ於て祝詞を申す
事あり建武年中行ハ庭ハ主殿察慢を引て宮主御被

して鏡刀擲あど風情の具足有り又ト部竹の節を庭
中の席上ハ置ク節折の命婦竹を持参りて御長ヨリ
始テ所ニの寸法を取畢テ宮主ハ切キ搦アがハせて御被
を勤ムるハありト荒世和世トて二度畢テ録を賜フ節折
をハ興遠理ト云フ竹ハて御長の寸法を切搦ガハ
ありト見元ナリ宮主ハ秘事ハ口傳ハ抄ハも其作法委シく
足有リ又其節折の如ク御櫻の神座を設ケる事ハ聞
えたりト又其節折の如ク御櫻の神座を設ケる事ハ聞
年内の仰事ハて夏ハ社ハ藤ハ折ハへ乾ハ式ハ部ハ今日ハ
乾ハ折ハ延ハ身ハ潔ハしテ麻ハ露ハ散ハ蟬ハの羽衣ハ有リ
又藤ハ折ハ延ハ身ハ潔ハしテ麻ハ露ハ散ハ蟬ハの羽衣ハ有リ
引テ契ハ沖ハ説ハ被ハ賤ハ物ハとシて衣ハあハ出スをハ篠ハ折ハ縣
り然れバ右ハの節折ハ竹ハハ御身ハ象ハりテ故ハ其ハ荒

服和服等を懸テ水ハ其御賤の節折の竹ハ即篠
濯キて被ハの事を為スるありト其御賤の節折の竹ハ即篠
あるハ就テ再考スるハ上ハ五百ハ引テ万葉ハ三四ハ十ハハ
天有左佐羅能小野之七相管取持テ有ハ此ハの故事
を詠ルるハ其管ハを取リ水ハたルハ非ス可ク
して節折の篠をも是ハ採リけテむハ左佐羅ハ
篠有リの義ハも聞ク又素戔嗚尊の和魂を速佐須良比
咩神ハ申奉リて即被ハ戸神ハ御在リ坐ハを大被ハ詞ハ根
国底之国ハ坐速佐須良比咩ハ云フ神持佐須良比失ハ年
と有テ罪咎を流離スへ失給フ神ハ渡リせ給ハ其
神ハ此ハて主ハと素戔嗚尊の罪過を流離スへ給ハる

名の遺りありて有べし如此云時ハ左佐羅を篠有サハラ
 流離カスラニ義ハ説る如くありとも然らず上三百六十
 小云猿樂ハ狹流篠舞ニ云事ありて天鈿女命天香山
 の小竹葉を宇草ウサ結ムスつて戯舞サシマシ給へる事あるが
 其宇草ハ一も本より妖氣を攘ふ所作を成し給へる
 ありバ小竹ハ流離カスラの意無しハ云べうず又竹
 を多和タカと云るも節折フシハ身長を量る小起コトりる名あり
 むとハ聞えたり故右ハ引る儀式ニ江記等ハ竹と有
 枚ハ其実を以て篠ハ其大凡を云るハ云るあり和名枚ハ篠和名
 志乃一云佐ニ俗用ハ竹ニ字謂之佐ニ細竹也と見
 えたる此ハ右ハ引る葉ハ葉之集ハ志乃ハ折延ハ又上
 有も小竹ハ此ハ此と同トきを曉る可くあり

ある荒世和世等の事ハ屬て次宮主捧土器中入小
 云ハ江次第ハ次捧壺授中臣官人中臣付中臣女供
 之天皇放ク氣於壺内三度訖中臣女傳神祇官神祇官
 授宮主宮主祝畢云ニ有か如く御氣を柑内ハ放た
 せ給へるを授給ハハ宮主祝詞を申して被清め奉る
 事右の節折ハ同ト儀式ハ宮主取祝訖授後取ト部荒
 世事畢退出略ハ解除河上ニ有か如く荒世和世ニ共
 小事訖りて河上ハ解除ハ事あり借右の節折ハ御身
 長ハ象りハありバ御身の穢惡を解除ハせ給へるか
 り次ハ御氣を此ハ放棄ハせ給へるハ御心の穢惡を

解除せ給へるが故に如此く同卜事の二度御在り坐
みず有べき心の淨不淨を云ハ外国の沙汰との思
ふ人も有あめども第一一書ハ天照太神謂素戔嗚尊
曰汝有^猶里心不欲與汝相見と詔給へる大御言一有れ
ハ如何ハ穢しずと云事の有む且右の事の二度有を
しと身と心と引當て心得ずハ如何ありける由と
うハ為む^儲又荒世和世の度ニ右の放気の事の御
事已ハ大被詞講義ハ云ハ今註さず此より以下
被具の事を云てむをも此ハ引合せて思ふ可き者
ゆハ儲倭姫命世記ゆハ若子命以麻被菊靈等進倭姫
命而令被解と有^{クサヒガタ}菊靈ハ一も其荒世和世等の略ハ

るゆや左右京職式の凡六月十二月大被預令掃除其
處赤土禁人往還元日篋明掃除菊靈と見えたるハ
各菊靈を持出て其被庭ハ置く事右の荒世和世ハ同
一^{ハナカケ}ま状あり山家集ハ里人ハ大幣小幣立並て身形結
ぶ野邊と成けり^ハ有ハ草を以て人形を造る事を云
るゆて古ハ人形と云るハ今の如く紙を以てハ作
さ^ハりハ^ハ初^ハころ^ハ新^ハハ人形者所謂素戔嗚尊之濫觴按手
足之ハ贖其罪身代之義也^ハ号贖物是也解繩者解謝罪
之義也散末者解謝其罪以米分散之義也と見えたる
ハ後世の式を以て推當たる者ありむと思ひて先ハ

ハ心も留ざりし事ありしごとく右の人形ハ上ノ謂
内ノ菊靈ノ事ハ節折ノ略儀あり心を着て見る
時ハ悉ク其謂有る事ハ有ける春日祭次第ハ神
祇官居被物散米一坏解繩一坏人形祝師申祝
於神前修被之
古手持笏左手取繩以箇之見元又
解之以人形撫身散米

平野祭次第ハ次宮主奉仕被詞到被
所以人形令吻給到中臣被入張取割
之處解繩給畢宮主退出進御贖物
有之又照光記
小建仁三年十一月八日平野祭予於殿上取御贖物儲
庭散米也持參入御座東間跪置御前次宣房取人形土

高畧未予取之欲置散米右御前傳云可置右物仍隨其
命人形置左右迴出於中門内^{右也}脊^{縁之南}取大麻^{宮主相}
取歸矣令撫御退歸給了歸座透渡殿東妻戸前御禊了
宮主退予參上候御前頒御贖物令撫御之由被申不聞
食入傳參進被拜ニ終奉撫人形予取人形授宣房次
取散米退下之有る右の如くハ主上の御も略式ハハ
人形を用ひさせ給へるあり是即節折ノ義あり故
あるあり散木集ハ思ふ事淺茅を刈り来りて厭
ひし身をも撫り今日哉と有ハ菊靈ハしも茅を以て
作る證あるあり
右ノ平野祭次第ハ以人形令吻給
有之也春日祭ハ以人形撫身之

有り照光記ハ奉撫ハ人形ト有カ如ク人形ハ身
体を撫ルるを本義ト爲ス事ナル今ハ社ノ式ヲ見ルハ
紙ヲ以テ人形ヲ作リて身ヲ撫テ息ヲ吹掛て身ノ罪
咎ヲ此ノ人形ニ移シ川邊ニ持出て被清め流シ遣ス事
ハ解繩ノ事ハ八省東廊大被次第ハ祝師置上御弁
座被物祝師著座臨禊詞及八張解繩ヲ禊ヲ祝師奉大
麻先上御下令持祝師一撫一吻返給リ見元上有ス
平野祭次第ハ中臣被八張取割之處解繩給ト有リ
又兵範記仁安二年十月十五日己酉天晴印刻参院今
日被祭遣十二社奉幣来廿五日日吉御幸御祈先例有
有限之儀式也略次供御贖物先白米一坏下官為陪膳
於西對南佛死邊略右少辨役送人形次陰陽頭有憲朝臣
取之院藏人傳之解繩次陰陽頭有憲朝臣

著座中座次使殿十二人著座次御被ト有ス當時此事陰
陽師の職ト成ルとも猶人形解繩ノ義有リ又台記仁平
元年八月十日春日詣陰陽頭憲榮朝臣修被下家同官
清酒如掌至高天原繩如常被畢有戌朝臣執大麻来腕余前
余其木綿撫リ有長朝臣還余前撤贖物ト見元ナルハ
解繩ノ所各同トナズ江次第ハ大被詞ハ謂ハル
ハ針取辟日の所ニて解クを右ハ至高天原ハ
其初端有高天原ハ神留坐ノ所ハ非ズ可ク陰陽
頭ノ所作有るを思ハル此詞ハ高天原年耳振立聞物止云ニ
文中ハ上略被給事ハ被戸乃八百萬乃御神達八佐子

△千五百番歌合
小御後川梅と淡
茅の人形ふ思上
心さ知られり我

△又御後川ぬ淡茅の糸とさへ皆人形ふ思ふに驚く

鹿乃八御耳乎振立天聞食止申と有れば其所あどか
この事あるや又伊勢神宮古記の解繩者即左繩
長一寸五分二條解法以左手取解繩嚙口可解凡曰如
繩繩解放如舳繩解放大海原亦伊吹放竿云こと有る
其解法ハ上ある春日祭次第ハ左手取繩以齒解之
省ハ異ありされども其咒文の如きハ全く後人の所
為あれば信難一但其齒を以て解く事ハ口と氣を吹
放つ状ハ一有ければ此ハ上ハ謂ゆる荒世和世の事
ハ屬了フホ坤の事の略ハもヤ有るむく拾遺愚草ハ誰
カ御袂同ト淡茅の本綿懸て先打靡く賀茂の河風夫

本集ハ御後思ふ事淡茅の繩ハ解著けて清き川瀬ハ
夏被しつと有ハ解繩ハ葛靈マ同トく茅を以て作る
證あり天被詞ハ天津菅曾字本所断未所切ハ針午取碎也見神樂酒殿歌ハ天小管を割被ひと云るふと悉
ハ由有る事共ハ有ける玉木正英ハ風水管窺マ
月晦日御被神事振神興於和泉國堺津而有解除之義
以官草長二握可拭身後後投之海水云事の有也
鮮繩の義ハ近今賀茂神宮ハ切解繩ハ紙ハ作
りて左繩右繩二筋を一寸程宛ハ切て左右の繩一所
続たる物ありと云ヒト家ハ麻を左縁ハして長さ
四寸程ハする由ありて今式ハ於てハ其定り無ガ如し
又散米の事ハ天武天皇五年御紀ある被柱の中ハ稻
一束と云事の見えたるハ解除の科あり日向風工記
ハ天暗暹晝夜不別人物失道物色難別於茲有土蜘蛛名

日本書紀傳十九

〇五百七十九

曰大鉗小鉗二人奏言皇孫以尊御手被稻十穗為勅投
散四方必得開晴于時如大蚌等所奏撻十穗稻為勅投
散即天開晴日月照光有是稻を以て妖氣を攘ハ
せ給へりあり右の引了春日祭次第の取繩以齒解之
以人形撫身散散未_マ有_カ如_ク三共_ニ相離_ルぬ物亦
有_リ田有_リ事ありけり又上_五百端出之繩の事_ニ就
て引了大殿祭詞の本註_ニ今世産屋以辟木束稻置戸
邊_ニ以米散屋中之類也_ニ云事の有_ル其不淨を掃ハ
む為_ニ散米の事有_リ源氏横笛卷_{十四}女三宮御産の所
小男君も寄り御在_リて如何ある_リと宣ふ糶米散_{ウチミ}

ありて為_テ乱_レガハ_ハき_ニ夢の何_レ怜_ム紛_レル_ル可_シと
有_リの作物語ありとも事實_ニ在_リる事を云_フあり紫式
部日記_ニ上_ニ渡_ルせ給_ヒて御覧_ス若宮御在_リ坐_セ
ハ散米_{ウチミ}一_ニ罵_ル云_フ殿の公_ニ遣_ハ二所源_ニ少將雅通_{あり}
散米を投_テ尻高_ク打_ツ成_サむ_ニ羊_ハ騷_ク云_フ若君御
誕生の後御湯殿の日_ニ荒_ルを打_ツ散_ス事を云_フありと見_ユ
御産記部類_ニ源礼記_ニ元永二年五月廿八日皇子誕
生_院堂徳同廿九日御浴殿右大臣女高倉殿持御劔典侍
藤能子散米_ト見_ユ又安徳天皇治兼御産記山槐記を
引_テ治兼二年十二月十二日中宮御産_ル此間内外周

△米を打蒔之云
ハ右の如き所由を
以て云稱又御教
之云然る意の言
とある聞えたる

章當障子也頻未二點皇子降誕と見え元女房故實録の
御産所の事大倪守カ散米包大筥云ニ御歩の候所
ハ散米を蒔き候と云事も所見たの備算疏の千座置
戸者被物之名略後世解除有四座置八座置之名各用
一束之稲是神世之遺法也之有ハ中頃四座置八座置
の上ハ各稲一束を置く事も有ハる云々
瑞穂国
西戎の如くも稲穂を以て汚穢を被酒むる事有ハる
可一葛洪神仙傳を見るハ王遠傳ハ經身婦新産敷日
始見^始之曰噫且止勿前即求^求米得^得之抛^抛之墮地謂
以^以米祛^祛其穢^穢云事の見えたるハ我^我上古の禁方の
彼^彼傳^傳ハ^ハ有^有ハ^ハき^き如此^{如此}其^其ハ^ハ明^明了^了の^の以^以て^て行^行く^くハ^ハ信
小叙ハ人形者所謂素戔嗚尊之盪觴按手足之凡曉其

罪身代之義也号曉物是也解繩者解謝罪之義也散米
者解謝其罪以米分散之義也之有ハ當昔世ハ行ハる
ニ式を以て神世の古ハ係ナる事の如ク有ハる也御
紀ハ其大旨を傳^傳レ^レた^た者^者有^有リ^リけ^けレ^レハ^ハ然^然ル^ル式^式目^目の
微細^{微細}ハ^ハ事^事ハ^ハて^てを^を記^記ス^スる^る可^可キ^キハ^ハ非^非レ^レハ^ハ他^他書^書ハ^ハ取^取て
考^考ふ^ふ可^可キ^キ事^事云^云ハ^ハ更^更有^有る^るを^を右^右ハ^ハ係^係コ^コハ^ハ云^云る^る事^事共^共の^の打
合^合て^て甚^甚隈^隈て^てハ^ハ所^所無^無キ^キを^を以^以て^て其^其然^然ル^ル趣^趣を^を明^明ス^スの^の曉
ル^ル可^可キ^キ者^者有^有リ^リ斯^斯レ^レハ^ハ節^節折^折ル^ル人^人形^形一^一有^有リ^リ其^其解^解繩^繩
ハ^ハ其^其氣^氣を^を放^放ツ^ツ事^事一^一有^有リ^リ偕^偕人^人形^形ハ^ハ身^身の^の被^被有^有リ^リ解^解繩^繩
ハ^ハ心^心の^の被^被有^有リ^リ散^散米^米ハ^ハ其^其身^身ハ^ハ着^着キ^キ心^心ハ^ハ着^着キ^キ穢^穢惡^惡を^を分^分散^散

一却ふ事ありて即此の贖其罪と有る是あり若て猶
 物の上を天津菅曾を以て打被ふ事右の云る大被詞
 又神樂歌等に見たり如し又大被詞の天津祝詞
 も此時の天兒屋命の宣申さし事あるを其の第三
 一書に其事の有る因にて其傳の云へければ此の引
 合せて替替○被其手足之凡贖之の第一一書に責其被
 ふ可し
 具是以有る予端吉棄物足端凶棄物と有る是ありて即第
 三、一書に以る予凡為吉凡棄物以足凡為足凡棄物と有
 り古事記の予足凡令被而云る拾遺の令被首髪
 及予足凡以贖之と有る其吉棄物凶棄物の後世の
 善被惡被の事あり其の傳二十一百五十の云べし偕右
 の使被髪此の被予足之凡と公解ヌキテ人指甲使掘暑預

又被人頭髮使昇樹巔新樹本落死昇者為快と有る
 如き殘忍ある事あり有べし五百五の云るが
 如く髪鬚置座木之化り唾洩は白和帶青和幣と化
 れる皆共の被具ありて此の用有る物共の成出た
 る事あり有けり此の予足の凡の限りて唯の被棄へ
 くも非りけり何れも物に化出たるをむを傳無れ
 今知べきありぬとも猶熟思ふ其所あり引了雄
 略天皇十三年御紀の齒田根命 眾有けり被收貯於
 物部目大連而使責讓齒田根命以馬八匹大刀八口被
 除罪過天武天皇五年御紀の四方為大解陰用物則國

別国造輸被控馬一匹布一常云ニ有と馬を初小拳
 げ猶大被詞の高天原尔耳振立聞物止馬牽立氏見
 元又江次第大被條小御賧物持末被馬牽立云事有
 て被小主たる物小有以とも其始詳あるぬを已
 小其詞小被法の事を天津宮事と云て天宮にて定れ
 る御政のし有けり此ハ決めて此手足の爪あり化
 出たる馬を被庭の牽立りたりけむも知べぬす
 但馬ハ四神出生章第十四ノ一書ハ見えたる如く已
 小保食神の御身より成出たる物ある小再其事の有
 ハ如何ある事ありとも此ハ化出たる置座木又和幣

△又今一の考も有
 り傳ニ百七十三
 二百九十のありき

ふとも其神の御靈ハ成て己ハ上天小在物あるを
 此被具の用ハの之其物の成出たる小等一なる可
 祈年祭詞小磐根木根履佐久弥馬爪至留極神賀詞
 小白御馬能前足爪後足爪踏立事波大宮能内外御所
 柱乎上津石根尔踏堅米下津石根尔踏凝之有と馬
 の事小多く爪を以て云も由有りける事ハ也爪和
 爪乎足指上甲和各豆サと云ハ大同類聚方小都鬮念
 と有ハ爪根の義あり可物ハ端を都末と云る同言
 あり備此髪爪を令按たる事を箕疏小其物已盡而不
 足則被髪被甲以補之也と有ハ非又通証小史范雖
 傳曰擢賈之髪以贖罪尚未足又齊世家曰自揃其蚤沈
 之河以祝於神帝王記曰成湯大旱七年自揃其蚤沈
 以己為犧牲禱於桑林之社と有ると今俗ハ神物
 を祈る者己が髪を剪て奉る小固トけり此ハ例小

日本書紀傳十九

〇五百八十三

成へ〇竟逐降焉の逐 を今本^本の逐の作りの誤なり
り第二一書に 遂以神逐之理逐之と見え第三一書
の乃共逐降去と有る照し合せて今此を改む^皆此逐降
の二字を古事記に依て神夜良比夜良比伎と訓る
ハ然る言あり逐の言ハ傳八九十の云りき^皆此素戔
鳴大神ハ此時の高天原より神逐ひ^皆逐ハ此
を奉り給ひける^皆此より後ハ御心甚清しく成
せさせ御在り坐て此顯国ありてハ二柱御祖神ハ
垂て尊く天下ハ無く御功坐神々御在り坐す事ハ
しも全く解除の驗ハ依りる者ありむ有ける上^{五百}
五十

五の己の引は此第三一書に既而諸神嘖素戔鳴尊曰
汝所行甚無頼故不可住於天上亦不可居於葦原中国
宣急過於底根之國乃共逐降去于時霖也素戔鳴尊結
束青草以為笠蓑而乞宿於衆神衆神曰汝是躬行湯惡
而見逐謫者如何乞宿於我遂同距之是以風雨雖甚不
得^自雷休而辛苦降矣^自尔以來世諱著笠蓑以入他人屋內
又諱負束草以入他人屋內有犯此者必債解除此太古
之遺法也^皆見えたり是^皆神逐ハ此と給ひて
甚く辛苦せ給へる所ハ有ける然ハ此時ハ其
被庭より直ハ逐ハ此と給へる事あり有けるハ其

御子神等をも牽て降り坐さりける御有状あり其ハ
天照太神と御誓の間ハ生出させ給へる五男神
給へる御在し坐せとも五男神ハ日神の御子と詔別させ
たる五十五猛命あとも天ハて坐する神あり下章見元
也此時ハ後奉る備第三一書の右の続さハ是後素
戔鳴尊曰諸神逐我ニ今當永去如何不與我相見而
擅自往去歟迺復扇天扇國上詣 于天時天鈿女見之
而告言於日神也日神曰吾身所以上来非復好意略々
云事の有ハ其大神天より諸神等ハ神逐ハ以て降着
せさせ御在し坐さるとも其始瑞珠盟約章ハ於是素
戔鳴尊請曰吾今奉教將就根國故欲暫向高天原與相

相見而後永退矣勅許之乃昇詣 之於天也と有る其
時ハ參昇させ給へる御心を所思し出させ給へる御
事あり然るハ根國底國ハしも御母神の御在し坐る
國ハ有けりハ素より志ざさせ給ひける故ハ御父
大神ハ乞奉らせ給ひけるハ其御怒を得て神逐ハれ
させ奉給ひける故ハ其器あむと為る状を日神ハ白
させ事を願奉らせ給へるハ然^勅許させ給へる大御命
を戴持して參上らせ給ひけるハ始より其辭見
の外ハ異し御心も御在し坐さりつるを高天原ハ
番あらせ御在し坐す程ハ終ハ天津罪を犯させ給へ

此の如何不共我
 勢相見而禮自
 徑去歟と宣給へ
 御言ふこと知れ
 又

る為の解除を願せて神逐はれ奉らせ給へば今ハ
 其逐はれ給へる根国の退去^{エツカ}らせ給へば今ハ
 ある所あるれども如此てハ己の御父大神の申させ給
 へると事の趣相乖違へるが故に今改めて其辞見ハ
 ハ参昇らせ給ひける者あり此ハ天照大神の明
 けの其状を申し又 諸神も日神の御為の神
 逐奉れるあれば違奉る由をも令知らむと實に清
 明き御心を以ての御所作の御在り坐け^ミ傳十
 五卷の右の文を説註せらるる合せて其実の然る所以
 を曉る可^レ但此ハ上ある瑞珠盟約章と同文の有
 混りたる者ある可^レ其ハ右の引る扇天

扇国の例の神性の雄健く御在り坐る故あり今云
 不三丁の拾遺の令大宮賣神侍^{ミコト}御前^{ミマエ}有る引て云
 十の如く手置帆負彦探知^{ヒコ}神の御功の依り坐せ奉り
 磐戸を出し奉りて後鎮奉る可^レ事の新殿の坐せ奉り
 て天津朝延の儀式厳重ある時^{トキ}の事ハ命^{ノミコト}有けり然
 の御事を奏し給ふ可^レ事ハ疑^シ坐せ給ふ可^レ事あり
 の非^レ武備の御事ある程^ハの事ハ御在り坐せ給ふ可^レ事あり
 然^レ許^レ武備の御事ある程^ハの事ハ御在り坐せ給ふ可^レ事あり
 鳴^レ尊^レ神^レ逐^レ御^レ勞^レを^レ成^レさ^レ諸^レ神^レの^レ仕^レ奉^レり^レ侍^レら^レ己^レの^レ素^レ茂^レ
 日^レ神^レの^レ混^レり^レ御^レ勞^レを^レ成^レさ^レ諸^レ神^レの^レ仕^レ奉^レり^レ侍^レら^レ己^レの^レ素^レ茂^レ
 在^レり^レ混^レり^レ御^レ勞^レを^レ成^レさ^レ諸^レ神^レの^レ仕^レ奉^レり^レ侍^レら^レ己^レの^レ素^レ茂^レ
 磐^レ戸^レの^レ混^レり^レ御^レ勞^レを^レ成^レさ^レ諸^レ神^レの^レ仕^レ奉^レり^レ侍^レら^レ己^レの^レ素^レ茂^レ
 所^レ無^レき^レ者^レを^レ成^レさ^レ諸^レ神^レの^レ仕^レ奉^レり^レ侍^レら^レ己^レの^レ素^レ茂^レ
 事^レの^レ混^レり^レ御^レ勞^レを^レ成^レさ^レ諸^レ神^レの^レ仕^レ奉^レり^レ侍^レら^レ己^レの^レ素^レ茂^レ
 乱^レれ^レ引^レり^レ者^レあり^レ其^レ下^レ於^レ是^レ素^レ茂^レ鳴^レ尊^レ白^レ日^レ神^レ日^レ吾
 所以更昇来者衆神處我以根国今當就去若不共相

見終不能忍離故實以清心復上未耳今則奉親已訖當
隨衆神之意自此永歸根國矣請妣照臨天國自可平安
且吾以清心所生兒等亦奉於妣已而復還降焉之有
此衆神處我以根國今當就^去上^の諸神噴素戔鳴尊
曰云ニ乃共逐降去^る有^る和^ら給^へる御言あるか
日神の御兄弟^ニ御在^り坐^る大神の渡^りせ給^へる者
を^何て^ハ諸神の自由^に逐^る奉^る事を得^て此^の解
陰を^負せて神逐^る逐^る奉^る其即日神の大御心の御
在^り坐^せば一^のハ其事を受賜^られる畏^こず^りを
聞^え奉^り二^のハ若不^レ典^々相見終不能忍離故實以清

心復上未耳^ハ右^に引^き瑞珠盟約章^の故欲^し暫^く向^高
天原典^々相見而後永退^る矣^ハ有^る如^く始^{より}其御心
おて参^昇せ給^ひし^うごも何^く此^の事共^に依^て其
御志を遂^{させ}御在^り坐^さる事を可^惜し^き奉^らせ給^へ
ひて其御事を明^くの申^{させ}給^ふあり上^の檀^自徑^去
歎^と有^る御言^の甚^く御刀^カ入^て見^えさせ給^へるあむ
實^の清明^き御心^の顯^はれさせ御在^り坐^る御事^{めて}
感^け奉^る由^を今^言の演^ゆるも中^にありける御有^状
ありける其^ハ右^の被^逐て降^給ひし時^ハ諸神^の宿
をも乞^へとも許^し奉^らる^程の甚^しき御事^{あり}を

此天降了せ給へる後、其御婚も成し奉り許さ
るを以て諸神の距き奉れり。日神の對奉りての御
事あるめて日神と御兄弟の御間た小睦まゝの成り
せさせ御在し坐す上りて、別れ申す旨無きを又
思ふ可き者あり。然れ此天孫降臨章第一
へる所、高皇產靈尊の御命以て天孫所居顯露之事
宜是吾孫治之汝則可以治神事云々宣給へるを大
己貴神の諾奉りて天神勅教慇懃如此敢不從命字吾
所治顯露事者皇孫當治吾將退治幽事之御答申給ひ
後、是時歸頂之首渠者大物主神及事代主神乃合八
十萬神於天高市、即以昇天陳其誠款之至云々有
同ト狀ふ心得て、次、且吾以清心所生児等亦奉於
違はざる者あり。前章五男三女神御生坐の所、
姊と申給へる此ハ

是時天照太神勅曰原其物根則八坂瓊之五百箇御統
者是吾物也故彼五男神悉是吾兒乃取而子養焉又勅
曰其十握劍者是素戔嗚尊物也故此三女神悉是尔兒
便授之素戔嗚尊略々詔別させ給へる其大御命を此
小至りて肯がひ奉りて給へる御言ある由已ハ傳十
五三四下ハ云るか如く古事記ハも於是天照太御神
告速須佐之男命是後所生五柱男子者物實因我物所
成故自吾子也先所生之三柱女子者物實因汝物所成
如此詔別也。有て右ハ同ト傳此ハ傳八十六下ハ始
て條ニハ云るか如く其四神出生章ハ既而伊弉諾尊

伊弉冉尊共議曰吾已生大八洲国及山川草木何不生
天下之主者歟於是共生日神略中次生素戔嗚尊と有が
如く二柱御祖神の天下之主者を生給ふとして此二
貴子の生成し奉るせ給へるあり然るを日神はも
天地の内を照徹する御徳御在り坐か故の天上を
送奉奉るせ給ひければ残りて唯素戔嗚尊を受張り
て天下之主者も御在り坐す御有状あり有れども其
始然所思し旋させ給ひて生奉るせ給へる御長子の
日神の御在り坐せし神隨ふして素戔嗚尊の御心の
も深く入給りざりけり此国を治給はむと為さ

せ給はず一向の御母国を意注しければ御父大神は
逐ひ奉給ひて恰も天下の主無き国の如く故天地
を預鑿造るせる皇祖天神の御霊や相副給ひけむ其
辞見の天の升りて妙尊の白して罷あむ御父大神
の白給へる其勅許の御在り坐ければ終る参升る
せ給ひける日神の御誓の御事及びせ給へる
本より清明き御心の徴有て信り宜しか如く男子を
生奉るせ給ひければ正勝吾勝と言奉せさせ給へる
日神の大御言以て其物根の事を仰詔給へる此
因て其鬼子の御為り天照太神の御父の如く素戔

鳴尊、御母の如く御在し坐す、此御子を以て天下
 を所知者しめ奉る事、右の引る二柱御祖神の何不
 生、天下之王者歟と詔言て二貴子を生奉るせ給へる
 御言此の於て結ぶる事あり故先の詔別させ給へ
 り、當時ハ勝進^{カチサビ}の御心強かり程の事ありて諾奉り
 給はざりけむを此に至りて信ふ其理の任み首がハ
 せ給へる御事とあり所見たりける故此の吾以清心
 所生児等亦奉於歟と云ふハ降して天下を所知者し
 め奉給はむ御契約共ころ御在し坐けし天孫降臨
 章第一一書ハ故天照太神乃略因勅皇孫曰葦原十五

百秋之瑞穂国是吾子孫可王之地也略々宣以下章第
 五、一書ハ素戔嗚尊曰韓郷之島是有金銀若使吾兒御
 之國不有浮宝者未是佳也略々宣へる事の御在し坐
 を以て其然る所以を曉る可し天照太神ハ天上を所
 坐あるハ此國土を是吾子孫可王之地也と宣ひ又素
 戔嗚尊ハ此國土を以て清心所生児等亦奉於歟と宣ひ
 天照太神ハ奉るせ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
 所御之國ハ宣給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
 り明の奉る可き御契約あり御在し坐けし御事を想像
 する氣疎けれ故其男御子を天照太神の御子と爲して
 奉るせ給ふ上ハ其女御子を素戔嗚尊の御子と爲して
 賜へるも亦此時ありて傳十五三四十云々如く

○日本書紀傳十九
 ○五百九十九

上章第六一書の便取其六男以為日神之子使居天原
即以日神所生三女神者使降居于葦原中国之宇佐島
矣有ハ此ハ素戔嗚尊の吾以清心所生兒等亦奉於
姪云ふ事ハ次て日神の宣ひ就させ給ふ可き所
有者あり其第一一書ハ乃以日神所生三女神令降
於筑紫洲因教之曰汝三神宜降居道中奉助天孫而為
天孫所祭也と有也此時其天孫を天降し給ハ玉御事
をいも此ハ素戔嗚尊と御契約の御在し坐るありす
ハ然ハ事教へ給ふより御事あるを明く可き者
あり偕此女御子ハ天照太神の成奉りせ給へるハ

ハ有れども其物根の御事ハ就て此ハ却りて素戔嗚
尊ハ御父の如く天照太神ハ御母の如く御在し
坐す所以ある事右の男御子の御事ハ思擬りて曉
る可き者あり改古事記大國主神の參到須佐之男命
之御許者其女須勢理毘賣出見為目合
而云こ見え又其大神の御言ハ其我之女須世理毘
賣為福后而云こ宣給へる御事ハ御在し坐るハ神
宮雜例集ハ載る皇太神の御言ハ吾高天原ハ在時素
戔嗚尊乃云こ所生三女神云こ須勢理姬乃尙奉禮苗
と有て此ハ天照太神の御子あり狀あり如此く此
事傳十六卷四若て其第三一書ハ已而復還降焉と
有るを下章第四一書ハ素戔嗚尊所行無狀故諸神
糾以千座置戸而逐逐之是時素戔嗚尊帥其子五十猛

猛神降^レ到於新羅国居曾尸茂梨之處云々有ハ先ハ
 逐ハル坐^レ一時復還降坐^レ一時其五十猛神を帥給
 へる時詳ありざるを其下ハ初五十猛神天降之時多
 將^レ樹種而下云々之事の有ハ就て考るハ此ハ在る
 初字ハ上より云下^レなる文ハ就て其最初の事を語
 る所ありハ素戔嗚尊の御天降の前後の事を云ふハ
 非ず借先ハ被庭より神逐ひハ逐ハルさせ給へる時
 ハ^ハも甚急劇^クハ^ハ状ハ聞ゆハ^ハ罪無き御子等あて
 を属けて逐ふ可きハ非ず^ハ繼令^シヤ共ハハ降り坐すと
 も木種を推乃へ給ふ程ハ猶豫^ハハ猶更^ハありて有ハハハ

念ふハ猶其初
 度ハ可き惟^ハ
 説有^レ其ハ傳^ハ
 卷^ハ下^ハ次^ハ辨^ハ
 あり

也非^ハ以^ハ其次の度ある^ハ著明^ハ思ふハ此再上^レせ
 給へる御時ハ文ハ如何不^レ共我身相見^レ而極自徑去
 歎^ハ有^レハ如^ク解除^ハ依^テ御心の甚清^クハ成^レせ
 させ給へる上^ハの事ありハ日神の御許ハ暫^ハハ留^レせ
 給へる事も有^レけむ也此第三^ハ一書ハ彼瑞珠盟約章
 あり故事の混入^レて日神と相共^ハ御子を生成坐^レ
 事の有^レハ其天上^ハ留^レり御在^レ坐^レす間ハ五十猛命等
 を令生給へ^レ御事の有^レけむを其を傳滿^セる^ハハ
 右の文ハ入混^ハひたるある可^ク地神本紀の系を見^レ
 り素戔嗚尊の御子田心姫命市杵島姫命湍津姫命三

神の御名を記して次五十猛神亦云大屋産神次大屋姫神次
 杵津姫神と次ニ書列ぬたる如く三女神ありの
 後の所生子神あるを其後の更の御妻問あとの御
 事の御在し坐べき御行状非なる事鎮りて此時を
 どの在ぬ可き御事思ふ初産ありて此の合する者あり
 然るに異本舊事記の服
 狭雄尊娶万魂分姫 神皇産靈尊女生兒五十猛
 命妹大屋媛命次杵津媛命と有る万魂分姫の異一の
 名あり疑わしき物なり神皇産靈尊女と有る據無き
 非ず長寛勘文の初天地本紀云略須佐之字命略降
 来伊豆毛国致熊野村宮極太知奉而加夫里支熊野大

御神地祇神皇又御見后大夜女命山狭村宮極太知奉
 而辭坐大御神三是也と有る甚く異なる傳あり物なり
 神皇又御見の神皇産靈之御見あり有けむを産靈
 の二字を脱し之を又の諱ある可し然れは上の
 伊謝那支命娶惠乃女命生大夜乃女命足夜乃女命次
 若夜乃女命三神此大夜之女命熊野大御神右坐と右の傳を誤れる
 伊謝那支命の御子と云成せりて其の後人
 の作意ありむも知べしとざるあり然れは其御名の
 四の違ふも復正し給へりし時やも章の上り坐
 けむ故の其事の混るるに神皇産靈尊の御女を

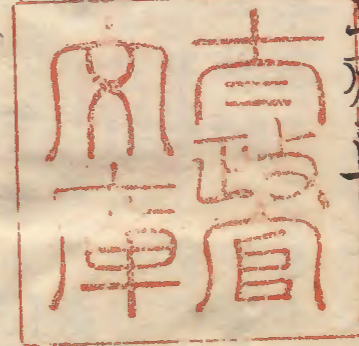
婚ひ給ひて五十猛神大屋姫神杵津姫神三柱を生し
 め給ひ即后神御子神をも共み率て此時中天降る世
 給へる御事とある所見たりける
 此御子神等何
 ありども其書復上りて給へる御事有日神と
 素受鳴尊二柱神の御誓をさせ給へる御事有日神と
 子盟約章を生成し給へる御事更今云ふ限非れども
 珠盟約章より混れたる事更今云ふ限非れども
 凡この文体いし其事を係て連ぬたる者あるか故
 お免も為れ其入混ひ方引さる事の無か非ざるを
 以て其然入混ひ方引さる事の無か非ざるを
 めすか有へる年頃思ひ是を以て其然誤お至れ
 て石の二護を得て始て甚年久しき惑ひを脱お至れ
 りまうの但御誓を御子を生成一坐る日神と相
 對ひ給ひて御事あるを此神皇産靈尊の御女を相
 も婚ひ給ひて御子の令生給へる日神御別を告奉
 御在し坐す程の事あり有けり日神御別を告奉

うせ給へるありハ少
 う以前的事あり





右十九卷安政四丁巳年二月九日始之目録五月八日終
之於小梅之草廬焉



日幸乃他信十九ノ十一
四丁巳
上田中

十九ノ十一
羅葉校合
大島

